

T A O G G E N

◎発行者 高田かつ子 〒336 浦和市南浦和3-19-2-303
◎事務局 下山昌孝 方 〒211 川崎市幸区小倉1-1, 1-514

TEL/FAX 048-881-9111
TEL/FAX 044-522-4185

七月六日、懇談と発表の会の日、古田氏はたまたまテレビ収録の都合で東京を訪れ、新しい発見について発表された。

古田武彦氏 臨時講演会

日本学界のエバンス説への反論

六月の十九日にエバンス説に関する大発見をしました。

私がエバンス説に対して肯定的な見方をしている、日本の唯一の研究者であることはご存じの通りですが、これに対しほとんどの日本の考古学者は反対していて、その先頭にいるのが慶応の江坂さん、それに右へ倣えて皆反対してるわけです。この間も国学院大学の小林さんが「一般人から見たら（バルデビアの土器と縄文は）似ているようだが、専門家から見たら違うんです」と言っておられました。ところが小林さん自身がコロンビアのサンハシント出土の土器の写真を見て、「あっ、これは似てますね」と言われて、ちょっと困っておられました。日本の火焰式土器によく似ているのです。しかしオフィシャルには反対説が日本の考古学界を支配していたのです。

今回の私の新発見というのは、その反対説とエバンスさんの肯定説を埋める問題を発見したのです。

今年の三月鹿児島へ行きまして、

新東晃一さんという鬼界カルデラ爆発の研究をなさっている方の所を伺ったことから始まります。このことはこの前出雲に旅行したときも、渋谷区の勤労福祉会館で講演したときも詳しく申し上げました。（多元十九号p11参照、付図も）

鬼界カルデラの爆発は今から六千三〇四百年前ですが、その下、つまりそれ以前の地層から大量の縄文土器が出土しました。降灰三十センチ以上の地域、二十センチ以下の地域、その中間の地域と三分しますと、私が見当では二十センチ以下の地域は被害は余り大きくなかった。少なくとも住んでいる人のかかなりの部分が生き残ることができたとおもわれます。反対に中心付近の地域では短時間にはほぼ全滅、中間の地域では何割かの人は生残ったがその後の生存がおぼつかない状態にあったのではないかと想像したのです。

この降灰二〇センチ以下の地域、長崎県・佐賀県・福岡県・山口県・島根県などがその後南九州の繁栄を



受け継いで、弥生時代にまでつながるのですが、その地域はまさに古事記・日本書紀の活躍舞台なのです。皆さんは記紀に筑紫や出雲ばかり出てくるのを不審に思ったことはありませんか？それはまさに鬼界カルデラの影響だったのです。

考古学者と火山学者の反応

私は最初新東さんに「各地域の被害状況には段階があるのでありませんか」と聞いたのですが、「いや、とにかく全然様式が違います」といって受け付けません。そこで以前からの知り合いであり、新東さんがヒントを得ていた町田さんに電話して聞いて見ました。その返事は、降灰二〇センチ以下の地域の人達の生活は大きな困難は無かったし、中間地域の人達が舟で脱出することも可能だったろうという意見を、いかにも理科系の人の明快さで聞くことができました。

エバンス説の擁護

エバンス説には弱点があったのです。バルデビア出土の土器と類似点のある日本の縄文は、有明海沿岸の土器が圧倒的に多いのです。轟木・曾畑・飛鳥・出水、それから関東の

三浦海岸の諸磯・水戸など出土のものでした。そこで江坂さんは、「世界の縄文展」で、『その類似は何を意味するかーエバンス博士の夢』という文章を発表されました。その反対点は、バルデビアから出土する縄文土器の形式が、九州西岸・有明海岸の物に類似している、太平洋岸・九州東南岸・宮崎県・高知県のそれとは似ていない、ということに対する批判でした。彼は「漂流説」に立っていましたが、西岸の人だけが漂流して、より近い太平洋岸の人がしない、というのは理論的に完結しない、夢である、というのです。

私は講演会で何回か触れました。その点、私は倭人伝を糸口にしてみましたから、これは計画的な航海として見るべきだ、と論じました。

然しそれは江坂説に対する一応の答えになっていても、最終的なものではありませんでした。なぜなら西岸の人だけが航海を行い、東南岸の人はしなかった、というのでは、その理由を説明しなければ理論的に完結しないからです。

海を越えた脱出者

今回鬼界カルデラの影響を考えに入れると、この関係を見事に説明することができません。鬼界カルデラの

爆発の影響は、データから三つに分けることができます。九州東南岸の人は壊滅状態にあり、西岸の人達だけが辛うじて脱出して、その一部が黒潮に乗って南米に辿り着いたと考えば、南米での出土状況を説明することができません。

しかも、この爆発はこのとき一回ではありません。五千年前にもありました。その時不安を感じて脱出した人もいたでしょう。

上黒岩の「女神石」

上黒岩というところは愛媛県にあり、そこに石灰岩の洞窟がありまして、そこから八体の「女神石」と名づけられた、自然石に加工して線刻されたものが出土しています。14Cで一万二千年前といわれています。ただこれは、その後進化したものは出ませんで、この年代だけに限られます。（この命名についてはいささか異議があります。イメージが「強烈」すぎるのです。しかし実物は一番線刻がはっきりしているものでも「明らかに女神」とは言い切れません。他の場所の「ヴィーナス」と呼ばれる土偶などを意識して命名したもので、実体を知らない人に誤ったイメージを与えることになるからです。

エバンスさんは南米からできた石偶と比較して、レポートに写真を載せて「似ている。伝播の結果ではないか」とされました。時期は初期のもので六千年ぐらいですね。南米ではさらに変化が見られ、現地に進化した模様がうかがわれます。

江坂氏はこれについては別段論評していませんが、上黒岩のものと南米の初期ものの年代的な落差（六、七千年）は大きすぎると感じて、これが江坂氏の反対説の一つの根拠になったであろうと思われれます。

ところがこの「無言の反証」に対する反証が最近現れました。高知県の四万十川中流域の西土佐村で、縄文後期の「女神石」が発見されたのです。実は上黒岩の方も行政区画では愛媛県ですが、旧幕時代の藩では土佐藩に属し、太平洋寄りなのです。上黒岩と西土佐村との年代は六千年以上になります。この中間が無い筈がないので、ミッシングリングはいずれ発見されるでしょう。いずれにせよ、上黒岩と南米の女神石は、これで十分に伝播の可能性があるとを証明されたのです。

女神石の消滅

また一万二千年程前には桜島ができる時の大爆発がありました。町田さ

んは「その時の灰は小笠原の海底にまで及んでいるだろう」と言っています。その時にも四国の太平洋岸から脱出した人々があったでしょう。上黒岩の「女神石」がそれ以後その地域では出なくなってしまうのは、このためである可能性があります。ところで黒潮の黒が色のことではなくて、神聖な意味を表す言葉だという話は以前申し上げました。クラ・クロ・クマはいずれも神を表す言葉です。上黒岩の黒も同様でしょう。ここを流れている川も久満川と申します。そういえば、黒潮の黒の調査をしました時、気が付きましたが、四国山脈の周辺には黒のつく地名がひしめいています。

上黒岩に、きょう参りますが、まず上黒岩の地名の元となった岩を探したいと思います。地名の元になる岩なら、そんなに小さい筈がない。以前にも探したことがあります。はつきりしません。ところがそこでいつも泊まる民宿のおばさんが、「『軍艦岩』ならあるけど」といいます。これに期待をかけているんですがね。そして、女神石は、この「上黒岩」のミニチュアではないかと期待しているのです。というのは、線刻が岩にかけられた「しめ縄」(稲の縄は弥生以後のものだが、それ以前でも、茅や葦や蔓が編まれた

ものが使われていた)ではないかと思うのです。

もう一つは河原に降りて、女神石によく似た石を探したいと思います。それからもし軍艦岩が女神石の原形だったら、あちらの方を『神大岩』そして今収集されている石を『神小石』と名付けたい。その方が「女神



石」などと見当で名付けられた名前よりずっと素晴らしいと思うのです。簡単に結果が出る搜索だとは思いませんが、何度か足を運べば見当がついて来ることもあると思っ期待しています。

複数の言語層

いずれにせよこの地帯が、古代か

ら複数の言語の層によって覆われている、ということは間違いないとおもいます。ここを流れている川が久満川であるのに対して、この村は三川村です。三川村の中の(字)上黒岩なのです。「三」は女神(例・イザナミ)を表すことは何度も申しました。クマが神を表す時間帯と、ミザナミ)を表す時間帯と、二つの言語の層が重なっている。そして上黒岩はクマの時間帯に属する地名で、その上に二重言語で「神」が重ねられたものであるということです。

なお、上黒岩に対して「下黒岩」「中黒岩」はないかと調べたのですが、結論からいうと「中黒岩」はありませんが「下黒岩」はないようです。どうも「中」は博多の那珂郡のナカと同じ「菜・肴」「処」で、ク口に供える肴を調べた場所だともいうのです。上中下の意識で付けた地名ではないので、「下黒岩」がないのが当然なのです。

エバンスさんの先見

ここで思い出すのは、一昨年来られた時に、火山のことを盛んに訊かれました。短い日数のうちに四・五回も訊かれました。私は博士から見れば火山の中で暮らしているようなものですから、なぜそれほど気になる

さるか分かりませんが、やはり女性の直感と、科学者としての直感で関心を持ったのだと思います。昨日送った第一報の手紙にも、「あなたの直感には正しかった」と付け加えました。

それから、諸磯式土器のことですが、エバンスさんは神奈川県三浦のものを見せているのですが、信州の阿久遺跡から出たのも諸磯式土器です。コロンビアのサン・ハシントからでた土器に、火焰式土器が似ているという話でした。火焰式は新潟県から長野県に分布しています。そこで適当な写真を集めて送ったのですが、博士は「これではない」ということで、最後に選んだのが飯田市のものでした。火焰式とはちょっと違うんですが。考えてみると飯田市は天竜川の流域で、太平洋岸じゃないですか？すると長野県で火山爆發があった時、天竜峡をサツと越えて太平洋に逃れることができたじゃないですか。諸磯式土器も三浦に限らず、式土器かもしれない、再調査しなければ、と思っっています。

テレビの収録

きょう、こう慌ただしく関東の皆様にお目にかかりましたのは、実は

て余来たらずば開くなき一間にし十二疊半の間なり

長三郎こと祖を桓武平氏の流れにて和田義盛が三男朝夷三郎義秀の子孫なり

神職をも兼たる故に和田長三郎吉次の別稱和田彦岐守吉次とも稱しぬ長男權七當歳にして初の男子なればその愛しさも倍なりき

山靴への旅行きはりくが既に承りて余の身支度くまでもそろふればたゞく頭垂る想ひなり 船待の間四日あり 此の宵は大光院にて宴げぬ 折しも満月にて冴えたる夜空ぞ青し

孝季日記より

一見他愛ない日常の雑事のみ書き連ねたものようですが、秋田孝季の实在感はこういう文書にも表れていて、大切なものです。

また同じ「北鑑」に、「人命を軽んずる宗教は邪道なり」「信仰に上下なし」などという、昨今の事件をスバリ喝破した言葉があります。

先の言葉はサリン事件を起した教団に属して過ちを侵した青年に聞かせてやりたいと思いますし、後の言葉は、世界中の宗教者が、信仰の上下を必死になって作り上げようとしている愚を一言で断じています。キ

リスト教は他の宗教より自分の宗教が優れていることを言おうとし、イスラム教もユダヤ教も同じことをしています。アミニズムという言葉あります

ですが、宗教学の分類上の言葉だと思っけていませんでした？ しかし実際は一神教の立場から、多神教を侮蔑した言葉だったのです。このよな宗教世界に対して『信仰に上下なし』とスバリと退ける秋田孝季という人は、私らの到底及ばない、すごい人だと思えます。

(まとめ・安藤哲朗)

書評

『日本人は「やさしい」のか』

竹内整一・ちくま新書・六六〇円

十税

「やさしい(い)」という、たった一つの単語に対する、一冊の辞書である。万葉集から源氏・平家・太平記・から現代文学、コマーシャルの「地球にやさしい」に至までの用法を追究し、その一つの言葉に対する日本人の感情の変遷、実に言葉をおつかうなら、ここまで徹底すべしと感心させられる。憶良の「世の中は憂しとやさしと思へども 飛び立ち兼ねつ鳥にしあらねば」に、こんな形でお目にかかるとは思わなかった。(て)

ライトの思わぬ効用

去る七月五日、古田先生とご一緒に佐倉の国立歴史民俗博物館へ、上黒岩遺跡のいわゆるメガミ石を見に行った時のこと。何人もの目で矯めつ眇めつしましたが線刻ははっきりしません。学芸員の方に説明をお願いするとライトを当てて見せてくれました。何と一本一本の線がはっきり浮かんできます。

それに味を占めて、あくる日の東博へも懐中電灯を持参しました。西土佐のビーナス線刻磔といわれるものを見るためです。見えました。隣に展示されている参考図などよりもっと複雑な線やかかげが見てとれました。

博物館では写真撮影はお断りが常識ですが、ライトについては今のところ触れられていません。(??)博物館行きにはライト持参をお薦めします。

それにしてもメガミ石とかビーナスとかの命名は何とかならないものでしょうか。アピールさせたい気持は分かりますが、余計な先入観を持たせないためにも線刻磔、上黒岩A・B・C位においてほしいものです。(か)

古田武彦氏

藤沢市市講演会

- 日時：九月一三日(土)午後一時半
- テーマ：南関東の旧石器時代
- 日時：九月一四日(日)午前一〇時
- テーマ：「邪馬台国」はなかった
- 場所：藤沢市善行公民館
- 交通機関：小田急江ノ島線善行駅 徒歩二分
- 参加費用：無料
- 申込み：8/11より電話または来館
- 住所：藤沢市善行1-2-3
- 電話：0466-81-4481
- 主催：藤沢市教育委員会

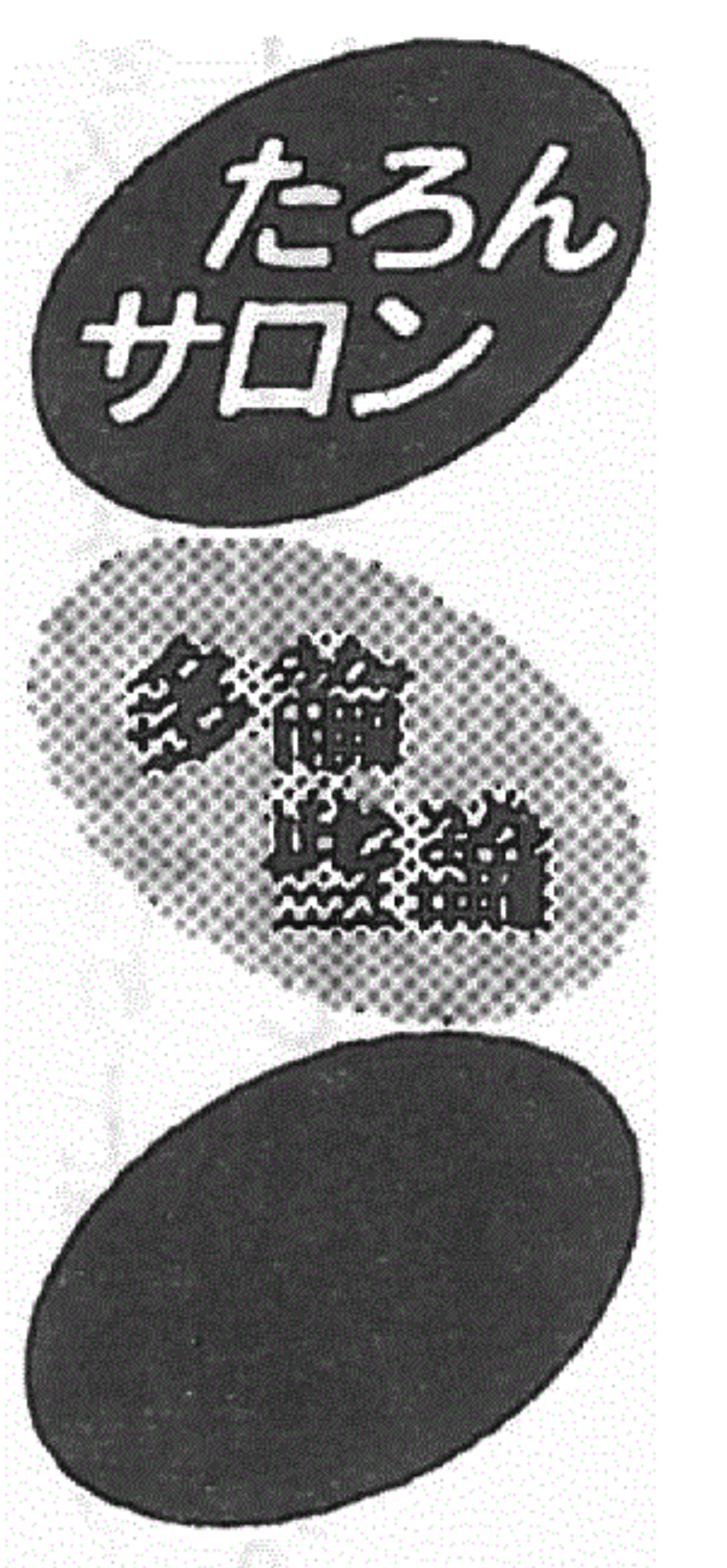
TV放送のお知らせ

TBS (CH6)

神々のいたずら

— 幻の環太平洋古代文明

- 前編 八月十日(日)午後八時
 - 後編 八月十七日(日)午後八時
- 縄文土器の南米への伝播について古田武彦氏が出演されます。



会員のページ
筆者はいずれも本会会員

倭地の移動

相模原市 岩崎 順子

弥生時代以前の倭人の領域について様々な仮説が立てられていますが、今、倭地は移動したと仮定して三世紀以前の痕跡を探してみました。

一、位置について
中国側の記録では時代別に次のように記述されています。

周 (山海経)

・蓋国は鉅燕の南、倭の北に在り。

・倭は燕に属す。

前漢 (漢書)

・楽浪海中有倭人(「云」は「以歳時来朝見」だけにかかると考えました。

楽浪郡の主要部分は、朝鮮半島北西部を占め東部は沮、貉、玄菟郡、蒼海郡、臨屯郡、辰韓、南部は弁韓、南西部は馬韓が占めていたので「楽浪海中」は黄海の東部分となります。

後漢 (後漢書)

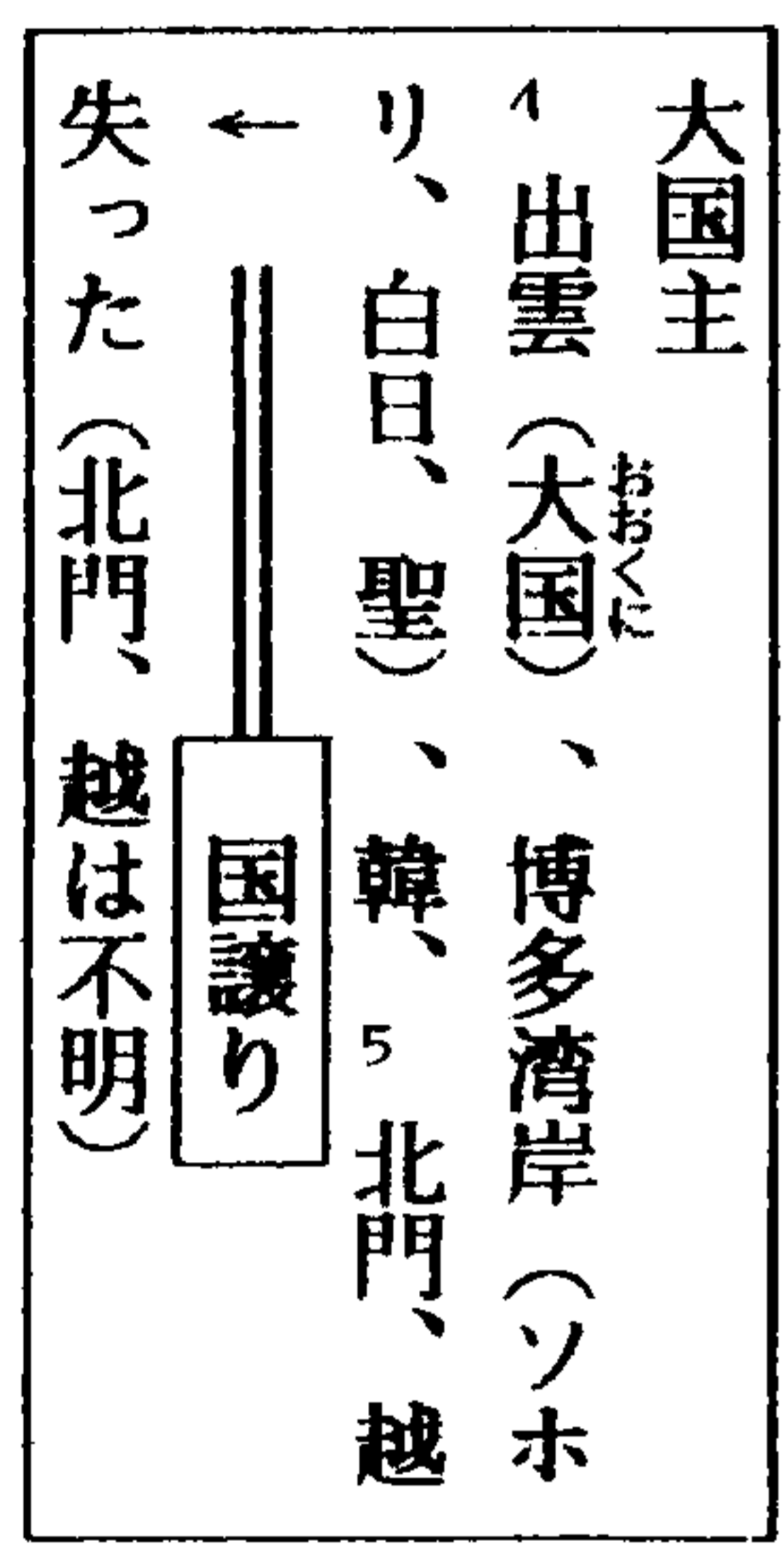
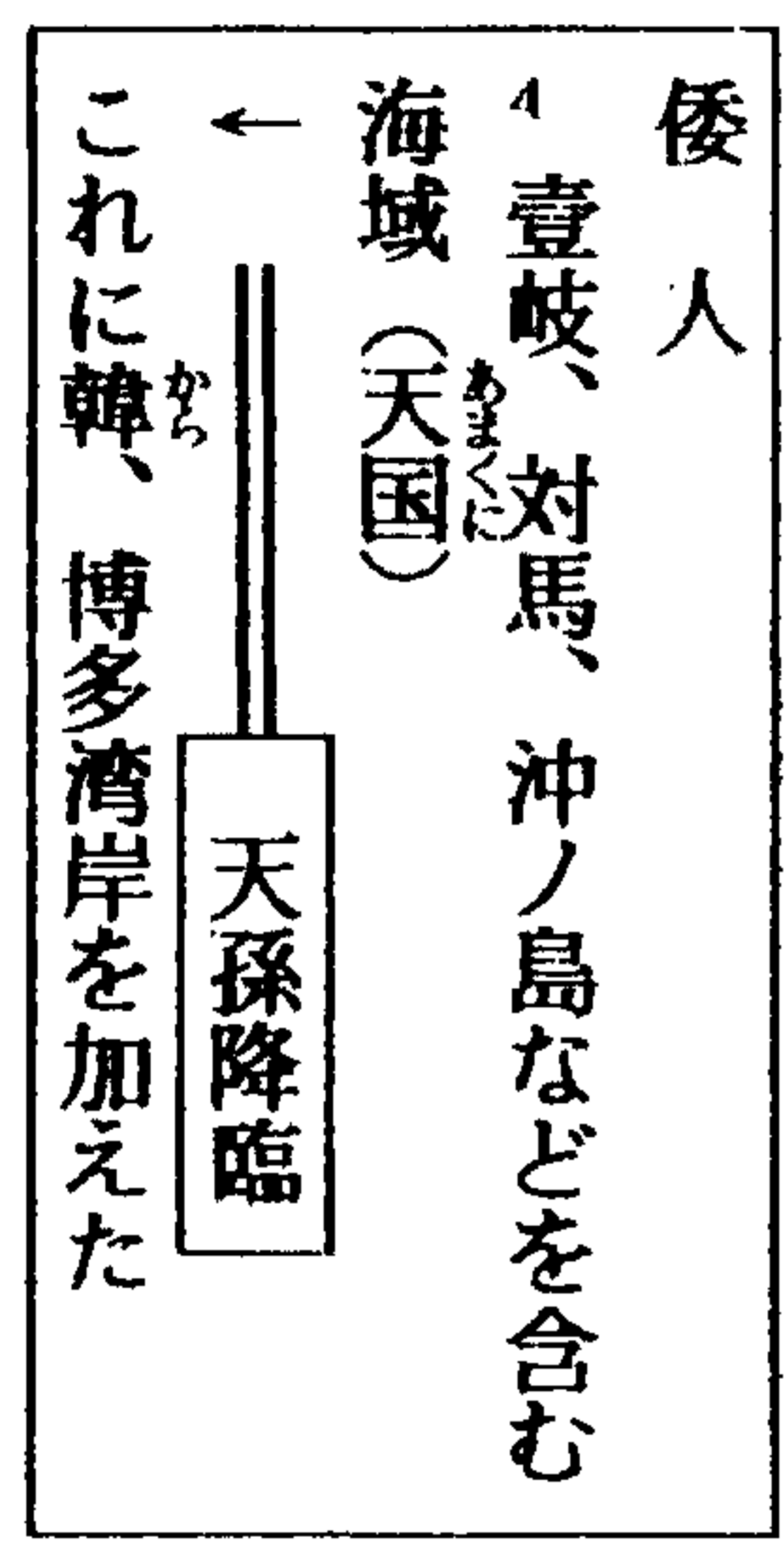
・倭在韓東南大海中

魏 (三国志)

・倭人在带方東南大海之中

つまり周から魏の時間帯、倭地は燕に近いところからしだいに南下したと考えられ、もし後漢以前に朝鮮半島内に移動していたなら箕氏朝鮮、衛氏朝鮮、楽浪郡、眞番郡、蒼海郡、臨屯郡などの一部あるいは並立した地として記述されたはずです。また前漢、後漢、魏では共通して海中に在ると記述されています。

次に倭人側の記録にみられる倭地とそれに関連する大國、北部九州の変動(弥生前期〜中期)は左のようになっています。



この変動から「国譲り」「天孫降臨」のイメージとして博多湾岸では、猿田彦が勢力を持ち大國主が一部を領有、全体的な力は大國主に有る時、倭人が十一年(二倍年曆だと五年半)かけて大國主を破り、その傘を失った猿田彦も負かされてしまったという情景が浮かんできます。邇邇芸命の「四至」文には倭人が初めて主権者として博多湾岸、韓に領域をもった喜びが表れていて、特に大陸の一部である韓に対するものは一層大きいように感じられます。

二、形態について

倭人側の記録によると日本書紀には「クニ」に対して「洲」、古事記には「島」が当てられていて、これは倭が自らの領有する陸地部分が古くから(この伝承が記録された時点からみて)洲や島であると認識していたこととなります。中国側の記録では「倭人……依山島爲国邑」、

「参問倭地、絶在海中洲島之上或絶或連、周旋可五千餘里」(倭の地を訪ねると、海上の島洲の上に住み、あるいは海にちぎられ、連なって、経めぐって歩くと五千余里(三百数

十km)だろう。)(三国志)となっていて、三世紀までの倭の領域のうち陸地部分は洲、島だったと考えられます。

このように倭地の形態に関する認識が倭人側、中国側双方で一致しています。

今、遼東半島西北部、遼東湾に臨む所に「蓋平」があります。こは「秦の時燕の人衛満(紀元前一九四衛氏朝鮮成立)が始めてここに拠り以後「平郭県(漢)……蓋洲(金)……蓋洲衛(明)、蓋平県(清)、蓋県(一九六五年)」と変わっています。衛満が来る前は燕ではなかったことになり山海経の示す「蓋国」はこのあたりだった可能性もあります。

遼東半島南部は標高二百m以下の土地が広がり沿岸(南に当たる)には長山群島他、また朝鮮半島西海岸にも群島などたくさんあり、倭地は周前漢の時、燕から楽浪郡にかけての黄海上の洲や島に在ったこととなります。(黄海の最大の深さは現在一四〇m)。

そして、中国側が倭を「国」として認識したのは「国譲り」「天孫降臨」により北部九州、朝鮮半島の一角に安定した陸地の領域を得た後、朝貢した時(紀元後五七年)ではないでしょうか。

参考文献

- 1 倭人伝を徹底して読む（大阪書籍）
- 2 中国正史の古代日本記録（章書房）
- 3 中国歴史地圖集 秦・西漢・東漢時期（三聯書店）
- 4 盗まれた神話（朝日新聞社）
- 5 古代は輝いていたI（朝日新聞社）
- 6 古事記（岩波書店）
- 7 中国地名辞典（凌雲出版）
- 8 全訳 世界の地理教科書シリーズ23 中国（帝国書院）

はやり正月のこと

浦和市 高田かつ子

直木賞作家・杉本章子氏の時代小説「はやり正月の心中」を読んでいた。なかに「はやり正月とは年頭から災いが続く年の六月朔日に改めて正月を迎え縁起直しをする大事な行事」という記述があった。はてこれは二倍年歴の痕跡ではないかと思っただ。春秋二回のお祭りとか、盆と正月の休みとかなどよりはっきりした年二回の正月の記録である。サラワクやパラオには今だに六月正月が実施されているという。

早速、杉本章子氏に出典をお尋ねしたところ御親切にも「江戸東京年表」と「武江年表」の抜き書きコピーを送って下さった。「武江年表」というのは、齋藤月岑の書いた武蔵国江戸の庶民の年表である。それによると、寛文七年（一六六七）・宝暦九年（一七五九）・明和八年（一七七二）・安永七年（一七七八）

文化十一年（一八一四）に、俄か正月を祝ったことが記されている。江戸期に時ならぬ正月が五回行われたという記録である。ただし正月は六月朔日に限ったことではなく、五月であったり七月であったり十月であったりしている。また災いを払う縁起直しというが、災いのあった年にすべて行なわれたというわけでもなく、たいして災いのなかった年にも行なわれている。例えば、寛政七年など。災いのあるなしにあまりかわりがないように見える。

「武江年表」には「袴補」「袴云」という補注が随所に出てくる。「袴」というのは喜多村筠庭（信節）という江戸後期の国学者・考証家のことだ。文政十三年に「嬉遊笑覧」を著している。「武江年表」安永七年の項を見ると、「袴補」安齋随筆、安永七年五月晦日、江戸にて大晦日と称し、節分の如く豆を打、厄払ひの乞食出、六月朔日を元日と称して門松を立雑煮を食し、屠蘇をのみ鏡餅を設け、町屋にては商をやめ、戸を立よせ簾をかけ、買人來れば雑煮を出し酒を進む、寶船の畫をうる者も出たり、江戸中如此したるには非ざれども、此事をなすもの多し、もと若狭よりはやり出て、諸国に傳へけるとぞ、彼国の土民山中にて異人に逢ひしが、如此すれば疫病を除くと教えし故、行ひ始めたりといふとあり、此正月を學ぶことは、古くは寛文七年にあり、夫より後は寶暦九年にもあり、嬉遊笑覧にいへり」とある。

安永七年には大火があった。そして「若狭よりはやったとあるのが気になる。若狭は鳥浜貝塚などのある縄文早期より開けた地である。記録は江戸時代だけの行事のようであるが、若狭にはそれ以前から何らかの伝承が残っているのではないだろうか。出典の「安齋随筆」というのは江戸中期の故実家、伊勢貞丈の随筆である。そこには何かヒントがあるかもしれないと思うのだがまだ手にしていない。

「嬉遊笑覧」を見ると、「時ならぬ正月」と項目を立てて次のように記されている。田舎にてはいつにても農業を休みてあそぶを正月といふ、

これ年の初め遊び居る事にたとへて云しにあらざ、其起りは何ぞの呪にてせし事と見えたり、寛文七年末七月六日町触、今度在々所々にて松飾りを仕り正月を祝ひ申由にて、江戸近辺の町屋迄其通り此月は祝ひ申由相聞候、就夫御代官所へも無用可仕旨被仰渡候間、江戸町中にても右之通正月を祝ひ申事、堅無用に可仕候云々。始めはかやうに松かさり何くれと正月の如くせし事なり「割註」近頃もこれに似たる事あり、節料理し福茶などするありき、年を経ては又々言出すとみゆ。」とある。

疫病を除くおまじないから始まったとされるはやり正月も最初の記録のある寛文七年には代官所より無用であるとの警告を受けている。その年は別にお払いをしなければならぬような疫病も大火事も発生していなかったからであろう。何にせよ大昔からの記憶に現われては消え、また現われるといった繰り返しを重ねて民族の血を遺伝させているのではないかと思えてくる行事、その一つが二倍年歴の名残りのはやり正月であらうかと考えている。

理化学的遺跡年代測定と

従来の考古学的手法の矛盾指摘記事

朝日新聞・九州版に

理化学測定と従来の考古学的手法の年代推定のズレを指摘した論文が掲載された。

「古墳の築造や遺跡の年代を判定する根拠は何なのか。国内では、文献や、基準になる土器をもとに「編年」方式などで総合判断する方法が主流だが、理化学的測定が従来の年代判定に疑問を投げかけている。

炭素の放射線同位体（14C）の性質を利用した測定結果はその一つ。中でも九州を中心とした地域の遺跡で考古学者らの年代判定よりかなり古い年代を示すデータが相次いでいる。大阪・池上曾根遺跡から最近出土した木材の年輪年代法による測定結果も弥生時代が百年近く繰り上がる可能性を示した。古代史の見直しにもつながる問題だけに、14Cの測定値に考古学者らは首をひねっている。

詩 信

千葉市 佐野 郁夫

ご無沙汰致しています。

私、五月二十四日―二十七日上海蘇州の旅を旧制中学の友人達と楽しんでできました。天気にも恵まれ仲良く遊んできました。少し報告します。上海の名所、東方名珠の名で有名な東洋一の高さ四六一米のテレビ塔展望室の高さ二六三米から鳥瞰景色を楽しみ、又、上海博物館では古代玉器館、古代青銅館、古代陶器館、素晴らしいものばかりで、忙しく見れました、時間の経つのが早かったですね。

古田武彦氏が声をからして指摘し続けてきた、14C無視の風潮、大家の権威に遠慮して、博物館の中でさえ、片隅で密かに掲示するのがやっとだった測定結果、矛盾に満ちた神殿から本体が現れる日は意外と近いかも。

注目し、応援しよう。理化学的考古学測定の夜明け。総ての発掘報告書に14Cの数値が記載され、それをコンピューター処理される日、日本の考古学が国際的仲間入りをする日でもある。

平成九年六月二十二日

周成王萬福徳方鼎、徳の字に心が無い時代、周の成王時代の西暦前一千一百年頃を徳方鼎の銘文に見出だして感無量。
韻「侵」平起

上海博物館 (二)

周成王萬福徳方鼎思

宝鼎尋往事 宝鼎往事を尋ぬ

成王萬福臨 成王萬福に臨む

呪飾天荒服 呪飾天荒服す

徳方不従心 徳方心に従わず

上海博物館 (三)

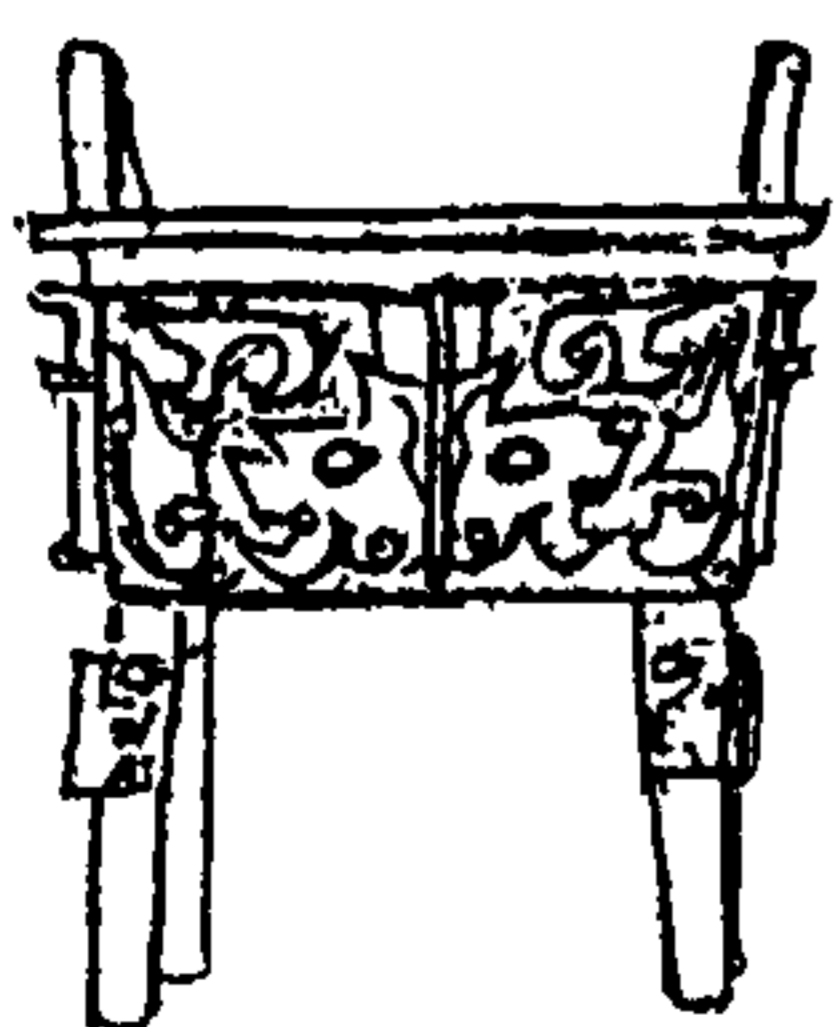
周成王萬福徳方鼎思

宝鼎尋往事

成王萬福臨

呪飾天荒服

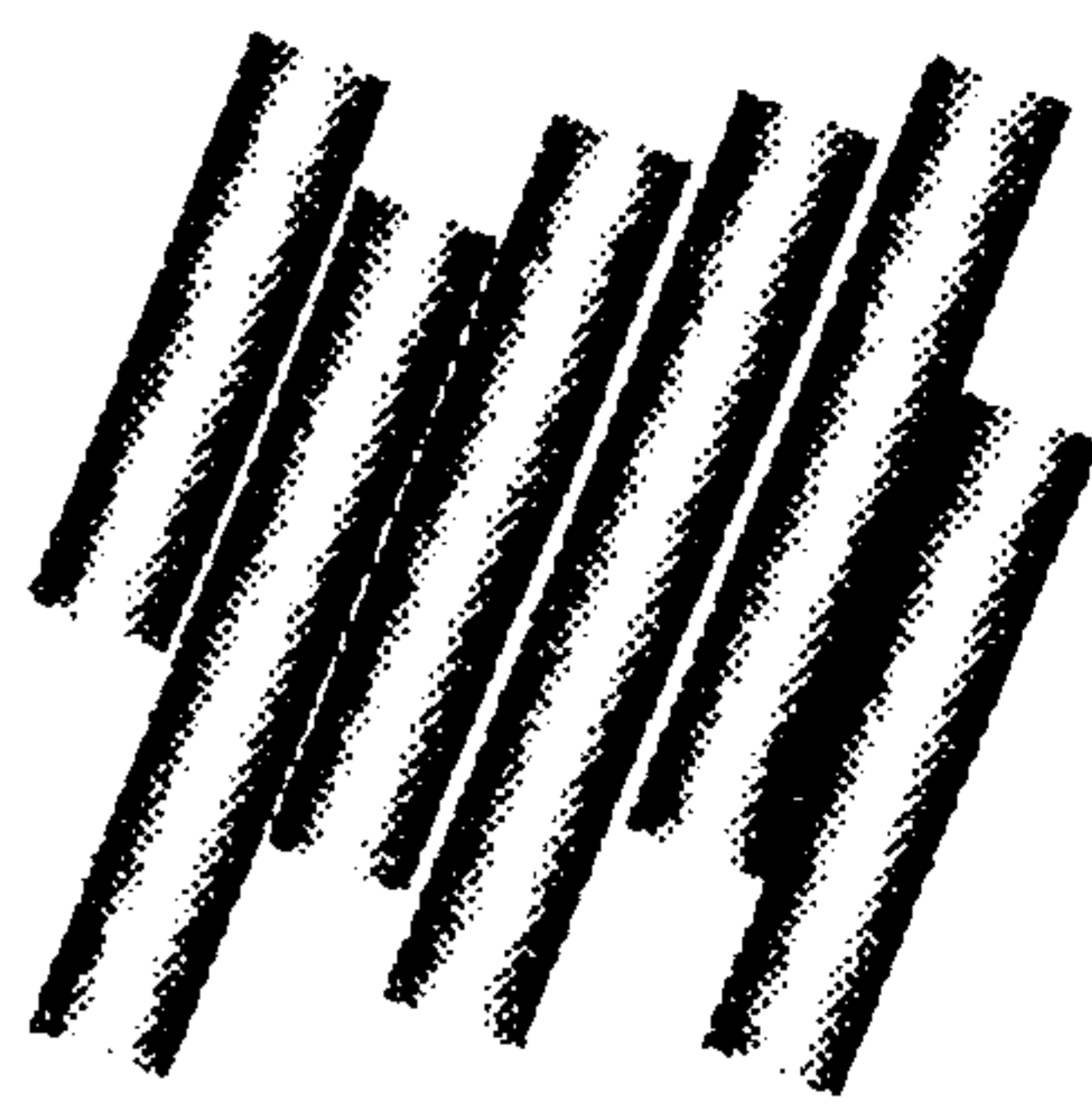
徳方不従心



御

成王萬福臨
寶鼎尋往事
周成王萬福臨
寶鼎尋往事

詩作数葉ありましたが、一作のみ取りあげさせていただきました。



山田宗睦

日本書紀講座

第二十六回

葬制はどのように変化したのか？

今回は第三年度の最終講義である。

巻二の神代下、第九段へ進む。天孫ニニギノミコトの天降りの部分である。ニニギの降臨に先立って葦原中国を平定すべく、タカミムスヒは天穗日命、次いでその子、大背飯三熊之大人を派遣するが、いずれも何の報告もしてこない。そこで、タカミムスヒは諸神を集めて、討議をさせたところ、今度は天国玉の子、天稚彦を派遣するのがよいということになった。ところが、天稚彦もまた、葦原中国で大己貴神の娘、下照姫と結婚したまま、やはり何の連絡もしてこない。

タカミムスヒが偵察のために雉を遣わしたところ、天稚彦はタカミムスヒから賜った弓矢で雉を射殺してしまう。その矢は高天原まで届き、タカミムスヒが取って投げ下ろしたところ、天稚彦の胸に命中、即死。下照姫は号泣する。この単純といっ

後に作られた神とみる。

てよい話の中に、いくつか大きな問題が含まれている。以下は山田先生の問題提起である。①タカミムスヒとアマテラスの関係②天稚彦が新嘗の床で死んだ意味③葬制の歴史から見て、この「もがり」は何を物語るか。

まず①だが、巻二の冒頭にいきなりアマテラス、タカミムスヒとあるが、実は本文にこのような形で登場するのは初めてである。本文、一書、さらに古事記を通して両者は、タカミムスヒのみ登場、先にタカミムスヒ、後でアマテラスが登場、あるいは登場の順序が逆、といった三つのパターンで現われる。タカミムスヒは高天原と共通の言葉であるが、高天原神話ができただけで、アマテラスとどちらが先に作られた神なのか。高天原神話は持統朝の頃に成立したと思われるが、津田左右吉は天は唐から輸入された概念で、タカミムスヒは最

後に作られた神とみる。これに対し、山田説ではアマテラスが最新で、タカミムスヒは半歩先を行っているとみる。タカミムスヒを作った勢力、アマテラスを作った勢力がわかれば、神代の巻は一挙に理解できると思われる根本問題であるが、だれも正面切って考えていないのが現状である。②天稚彦は下照姫と結婚し、葦原中国を治めようという意欲を持つ。そして、新嘗の後、床の臥せていた時、タカミムスヒが投げ返した矢に当たって死ぬ。新嘗は二度目の出現で、高天原でアマテラスが新嘗を行っていたところ、スサノヲがじゃまをした箇所以来のことである。ここで、天稚彦が新嘗を終えて、床に臥せていた意味だが、特別なものはない。天武・持統時代までは、大嘗と新嘗の区別はなかった。それが生じたのは平安時代以降のことである。(編集子曰く、この

点私見では異論がある。書紀では持統五年十一月に初めて大嘗を記す。天武二年には自ら大嘗を行ったとは記せず、大嘗に参加したものを賞したにすぎない。勢威は九州を圧していても、名分はまだ自ら大嘗するに至らなかったのではあるまいか。他の徴証(例えば統紀文武・大宝元年春正月の「文物の儀、是に於て備われり」)からも推測される)

よく国文学者が儀礼から神話が生まれたという儀礼説を主張するが、それは逆立ちした考え方であると思

う。③天稚彦が死んで、「もがり」が行われる場面は実に貴重な資料である。古墳からの葬制の変化を物語っているからだ。下照姫を始め、関係者が八日八晩号泣を続けたというところは、現在も変わらぬ朝鮮の葬式を彷彿とさせる。日本も同じような葬儀の時代があったこと、本来、保守的なのは葬制が、日本ではなぜか変化したことがうかがえる。ただ、ここで鳥がでてくることや使われている用語には理解しがたいものが多い。

いつものように印象深い問題提起が相次いで行われた中で、なぜアマテラスは専制君主的でタカミムスヒは民主的(衆議を集める)なのか、と問われたのは驚いた。テキストを読みながら考えもしなかったからである。(木村由紀雄・記)

定例活動の報告

富永長三

万葉集と漢文を読む会 (五・二五)

むろがやの 都留の堤の 成りぬがに 児ろは言へども いまだ寝なくに

「むろがや」は都留に掛る枕詞。

むろがやも都留も地名。なかならず都留は『和名抄』の甲斐国都留に当てる説、等々、そしてこの二句は、堤の成る事と二人の仲の成る事を掛けた譬喩の序とする。

むろがやの都留の堤が出来たように、二人の仲の成就をあの児は言うけれど、まだ共寝はしてはいない。等と解釈する。どうもびったりしない解釈だ。そこで『常陸国風土記』

香島郡・白鳥の堤、の例を引いて、都留は鶴ではないかが、と言ってはみたがそれで一首の解釈が成り立つわけではない。すると都留はつるむ

(交尾の意、古典では相交・遊牝・婚などと記す)の意ではないか。と長老小嶋氏の言。

むろ菴に(包まれて・つるむ)つるの堤で二人の仲は成りましよう、とあの児は云うけれど、まだ共寝はしていない。なるほど、女に軽くあしらわれた男の歌ですか、と小生。(『常陸国風土記』の例を引くまでもなく、水辺は歌垣の場としてふさ

わしい。) 皆さんは如何お考えでしょうか。(富永長三)

漢文は隋書靺鞨伝の末尾。隋末対高麗戦に、靺鞨の將軍が其の衆を率いて降る。いろいろ寵賞に預かって、最後に乱に巻き込まれて「前後十餘戦、僅かに免るるを得、高陽に至り、王須拔に没す。幾ばくもあらず、遁れて羅藝に帰る」固有名詞が多く事情が前後反転して把握出来ない。預かりにして調べ直す事にした。(安藤哲朗)

万葉集と漢文を読む会 (六・二二)

台風一過の暑い日、富永師範が欠席で、皆さん大いに羽を伸ばす。

青楊の はらろかはとに 汝も待つと せみどはくまず たちどならずも 「あおやぎ」は柳か楊か。同じ頃の唐詩に「風は新柳の髪を梳けずり」でもやっぱ楊だろうなあ。

「かはと」は水門か。辞書が挙げる用例も全てこの歌が唯一の出所で、ほとんど同語反復である。

四首進んだが掘下げ内容乏しく、この次またやり直し。

漢文は流求伝に。そもそも流求とは、今の台湾かはた沖繩か。中国版の歴史地図帳には台湾になっている。

後の方で「義安より海に浮び之を撃つ」とあり、これからは沖繩では説明できない。しかし布甲が「夷邪久国人の所用」とあり、この辺は台湾ではちょっと難しい。第一今「琉球」の名が遺存する沖繩に、第一の候補を置くべきところ。十分討議して見たい。文中人肉嗜食の記事があり、台湾の高砂族などの伝説?に付会されたのではないか。

なお、次回(七月六日および二、三回)は、青山氏の提唱により、古田氏が今回問題提起した、新・旧唐書・倭・日本伝を回読し其の差を検証することとした。(安藤哲朗)

訂正のお知らせ

多元十九号17頁『定例活動の報告』七行の「弥生の大和の物よりは上質である」はやや誇大につき取り消します。

対馬の古跡と君が代の源流を

訪ねる旅(休暇村・志賀島)

期日 平成九年十一月十三、十五日

料金 全日程 五八八〇〇円
対馬のみ 四四〇〇円

講師 「多元的古代」研究会九州
灰塚照明氏

問合せ先 東京〇三・三二一六・二〇八五 (休暇村センター・東京)

古田武彦氏から次のような報告書が寄せられました。

御報告

今回上梓した『海の古代史』(原書房刊)は数多くの方々の厚いお志によって成った書物です。

そのため、室戸汽船(土屋誠之社長)の御幹旋により、わたし名義の印税(全額)を神戸市市民福祉振興基金に入れ、震災復興の一助とさせていただきます。右、勝手ながら関係各位のご了承をお願いいたしたく、御報告申し上げます。

一九九七年三月十八日

各位



平成九年三月十八日

休暇村センター

【事務局便り】

平成八年度定期大会

◆定期大会報告 六月一日(日)

午後一時半より、懇談と発表の会を兼ねて、平成九年度定期大会を開催しました。下山昌孝事務局長の司会で、議長に木村由紀雄氏が専任され、議事に移りました。主要議事は、①平成八年度活動報告②同年度会計報告③平成九年度活動計画④同年度予算⑤役員改選が上程され、幹事会提案通りに承認され、議事を終了しました。(会計報告および今年度予算の内容は下記表のとおり。)

なお、新役員および会長指名による幹事は次のように専任されました。今後二年間にわたり本会の運営を担当して行きますので、宜しくお願いたします。

(会長) 高田かつ子、(副会長兼会報編集担当) 安藤哲朗

(幹事) 青山富士夫、網島正嗣、小嶋源四郎、鴨下武之(会報副編集長)、木村由紀雄、下山昌孝(幹事長兼事務局長)、富永長三(会計)、福永晋三、八谷進、湯川由雄

大会の後、五月二四、二六日の「出雲の旅」と、その際見学した遺跡・遺物や数々の祭りの行事について、活発な検討会が行われました。

「多元的古代」研究会・関東 1996年度決算報告 (1996.4.1 ~ 1997.3.31)

収 入		予 算	決 算
前期繰越金	410,573		410,573
会費	1,030,000		980,000
(会費 250人 1000.000)			(238人 952.000)
(新入会費 30人 30.000)			(28人 28.000)
事業収入	50,000		30,536
雑収入	10,000		21,532
前受金			100,000
計	1,500,573		1,542,641

支 出		予 算	決 算
会報費	780,000		627,659
はがき通信費	120,000		106,585
友好団体交流費	50,000		51,901
事業費			57,800
運営事務費	200,000		241,390
予備費	350,573		357,306
前受金払い出し			100,000
計	1,500,573		1,542,641

1997年度 予算(案)			
収 入		支 出	
前期繰越金	357,306	会報発行費	700,000
会費	950,000	はがき通信費	110,000
(会費 230人 920.000)		交流会費	50,000
(新入会費 30人 30.000)		運営事務費	240,000
事業収入	100,000	予備費	317,306
雑収入	10,000		
計	1,417,306	計	1,417,306

支出細目	
会報発行費	
編集費	217,463
印刷費	151,046
発送費	259,150
計	627,659

はがき通信費	
はがき代	75,250
印刷費	16,066
雑費	15,269
計	106,585

事業費	
送別会	18,671
講演会	-46,932
書籍販売	11,865
旅行中止経費	-10,868
計	-27,264

運営事務費	
例会運営費	108,860
幹事会会場費	29,560
運営諸経費	95,687
仮払い	7,283
計	241,390

友好団体交流費	
会報交換費	28,890
九州・古田会	23,011
計	51,901

残高目録	
郵貯振込口座	100,000
郵便貯金	300,000
現金	57,306
計	457,306

会 計 富永長三㊦ 会計監査 網島正嗣㊦

多元の会 カレンダー

記入のない催しの会場は全て文京区民センターです。

8月

3日(日) 午後1時 発表と懇談の会
 今月の話題提供者とテーマは、

鴨下武之氏「中国長江文明域の遺跡を訪ねて」

下山昌孝氏「考古学的に見る、朝鮮半島と北九州の関係について」 (7月に予定していましたが、古田武彦氏が上京、特別講演がありましたので、8月に延期しました。)

24日(日) 午後1時「万葉集と漢文を読む会」万葉集は巻14「東歌」を読み進めます。漢文は例月『隋書』東夷伝を読み進めてきましたが、今回は古田先生が問題提起された旧唐書・新唐書の倭国・日本伝を読みます。ご期待ください。テキストのプリントは会の方で用意しますので、今まで見送って来られた方も是非積極的にご参加ください。

9月

7日(日) 午後1時 発表と懇談の会
 今月の話題提供者とテーマは、

「南九州の縄文早 創期遺跡を訪ねて」

(鴨下・下山両氏による)

富永長三氏『鐸型土製品・寸考』

14日(日) 午後1時半山田宗睦氏『日本書紀講座』

28日(日) 午後1時「万葉集と漢文を読む会」

10月

5日(日) 上野国分寺跡歴史散歩 (別項)

26日(日) 午後1時半 発表と懇談の会

かながわ考古学財団の栗原伸好氏による特別講演です。最古の炭化加工木(旧石器時代)の発掘に従事されている同氏のお話にご期待ください。

【特別講演会】

かながわ考古学財団の栗原伸好氏による特別講演です。栗原氏は旧石器時代の遺跡として初めての木材遺構が検出されて、非常に注目されている、神奈川県藤沢市用田遺跡等の発掘を担当された方であり、発掘現場からの興味深いお話が色々聞かれます。

◆日時 十月二十六日(日)午後一時半より(万葉集・漢文の集まりは中止)

テーマ 『神奈川県藤沢市用田ハイパス関連遺跡群ローム層中出土の炭化加工木について』

【日本書紀講座】(山田宗睦氏)
 平成9年度は九月十四日の開講で

【古田武彦氏臨時講演会について】

山田先生の講義は書紀の一行一行を、丁寧にじっくり読め進めていきます。大筋としては、古田武彦氏の九州王朝説を容認しながら、細部については随所に独自の解釈をちりばめていきます。第3年度を終わって、新年度は巻第二「神代下」の始めから進めていきます。

巻頭に載せましたように、古田武彦氏には突然に上京のスケジュールが発生しました。事務局として六月一日(日)の「懇談と発表の会」を変更して、小講演会を開かせていた

【古田武彦氏臨時講演会について】
 巻頭に載せましたように、古田武彦氏には突然に上京のスケジュールが発生しました。事務局として六月一日(日)の「懇談と発表の会」を変更して、小講演会を開かせていた

【「新・古代学」原稿募集】

本年、「新・古代学」第三集が発行されますが、論文・随筆・論考など、古代史関係の原稿を募集します。応募の方は安藤まで。長いものでも四百字詰め原稿用紙十八枚以下を原則とします。

【「新・古代学」原稿募集】
 本年、「新・古代学」第三集が発行されますが、論文・随筆・論考など、古代史関係の原稿を募集します。

応募の方は安藤まで。長いものでも四百字詰め原稿用紙十八枚以下を原則とします。

【遺跡散歩のおさそい】

総社古墳群と山王廃寺跡
 上野国分寺跡を散策して見ましよう。◆総社古墳群は六世紀後半から七世紀末までの古墳群、◆総社二子山古墳◆愛宕山古墳◆宝塔山古墳◆蛇穴山古墳◆山王廃寺跡は「放光寺」と銘書された瓦が出土しています。

◆日時・一〇月五日(日)◆集合・JR上野駅八時ごろ◆新前橋駅一〇時半ごろ◆なお時間はタイヤ変更が見込まれるので、詳しくは九月八日通信をご覧ください。◆歩きやすい服装で◆お弁当をもち参

【「新・古代学」編集担当】
 『新・古代学』第三集の編集担当団体は、古田史学の会(水野孝夫代表)に決定しました。当会としても出版社と近いことなどから、できる限り援助して行くことにいたします。



◆会員諸氏の原稿をお待ちしています。必ずしも学術的なものに限定しません。ただし採否および掲載時期はお任せください◆編集者への連絡は左記へ・〒232横浜市南区永田みなみ台2・10・401安藤哲朗(☎045・742・1446、フアクスも)
 (哲朗誠惶誠恐頓首謹言)